

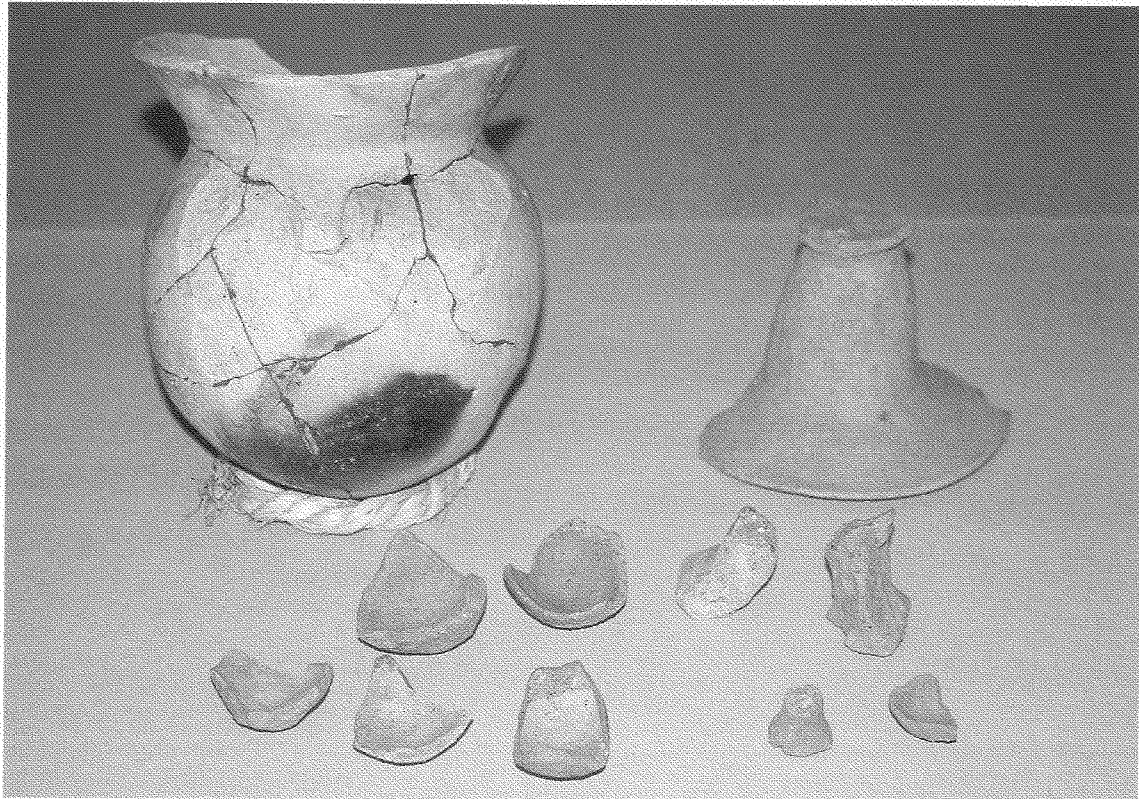
べっふの文化財

No.31

平成12年3月

—埋もれた文化財を求めて—

失われつつある石造物を中心に



末行遺跡出土のミニチュア土器(後方は普通の大きさの土器)

別府市教育委員会
別府市文化財調査員

のふるまひのこころをめぐって

別府市に所在する文化財は、市指定の文化財のほかに国・県指定の文化財を加えると59件を数える。教育委員会では、別府市に文化財調査員(旧保護委員会)が設置されて30周年にあたる昭和58年に、指定文化財を集大成した「別府の文化財」を、さらに40周年にあたる平成4年には保護樹を加えた「別府市の文化財と保護樹」を刊行した。昭和58年の刊行の際、解説書のあとがきに故安部巖調査員が「(別府市には)これ以外にも数多くのすぐれた文化財が残されています。まさに文化財保存に関する問題解決はこれからであります。」と書かれている。

未指定であるが指定に準ずる価値の高い文化財は、地域の人々に篤く庇護されているものもあるが、いつのまにか移転され、あるいは埋没・崩壊して喪失の寸前にあるものも少なくない。たとえ指定はなくとも郷土の歴史の証となる文化財を「べっぶの文化財」にとどめて、多くの人々の関心を惹起することができれば、安部氏のご提言の一助にもなり、文化財保護の面からも大いに意義のあることと思われる。

(文化財調査員 入江秀利)

キリシタンに関するもの

別府市域のキリシタン塔(墓)は現在約70余基発見されている。その分布は、内成・枝郷・鳥越・柳など西南部の山間部に密であり、やがて朝見村や別府村を経て石垣村へと広がっている。おそらく別府のキリシタン信仰の流れは、大分郡の庄内や挾間から由布川や石城川づたいに、あるいは庄ノ原台地から伝播したのであろう。

キリシタン信仰が別府に入った年代は定かでないが、墓石の記年は宗教弾圧が激しくなった寛永年間のものが多い。

キリシタン塔の形式は宝篋印塔の形態をかりるが、笠に隅飾りがないもの、笠に段がなく軒の厚いものがあり、双方とも相輪そうりんに特徴がある。

また、キリシタン塔と断定する所以は、笠と塔身の接面部、塔身と基礎の接面部に隠しクルスが彫られている。また塔の表面に無造作に引き掻いたような線クルスが幾つも刻まれている。

キリスト聖像(頭部)



キリスト聖像頭部は、昭和26年頃上朝見の台地の上にある耕地で発見されたといわれる。

往時は耕地の石垣の一部として顔面を内側にして積み込まれていたのであろう。石材は朝見地方に多い硬質の安山岩で、後頭部は加工せず自然石のままであるが、顔面は明らかに西洋人で、額にクルスが浅く大きく陰刻されている。

この像は宣教師のものともいわれるが、礼拝の対象と思われることから、キリストと考えるべきであろう。

この聖像が作られた年代は不明であるが、おそらく改宗を迫られた朝見の信徒たちが、聖像を耕地の

石垣に隠して密かに礼拝を続けていたのであろう。

熊本大学が所蔵する『浜脇村崇福寺文書(「天罰起請文」)』に次のようなものがある。

「今度伴天連門徒御改二付テ

浅見村 兵 吉

浜脇村 新十郎

今迄きりしたんにて御座候つれ共 今月九日ヨリ我等宗旨に罷成候 此者之儀 向後迄我等請人二立申

若相違之儀御座候と脇口より立 御耳二候ハハ拙者ヲ可被御成敗候 云々

慶長拾九年三月九日

浜脇村崇福寺 玄香 ㊦

田村三右衛門殿

田 仲 覚 兵 殿

朝見村兵吉と浜脇村新十郎が、慶長十九年に改宗(ころび)して崇福寺の仏教門徒になったという文書である。二人は「伴天連門徒改」でやむなく改宗したが、その子孫は代々「転びキリシタン」の類族として監視されることになる。

寛永十年代から「宗門改」が過酷になった。聖像が石垣に積み込まれたのはこの頃ではないだろうか。朝見のキリシタン達はその後全員改宗させられたのか、詳しい記録は残っていない。

逆祀のキリシタン墓



乙原吉祥寺の墓地に、寛永十四年心岳宗転

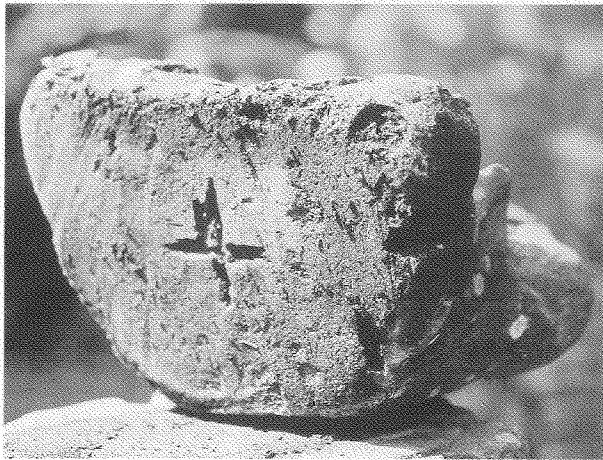
と彫られた墓標が立っている。上部の月輪にぎこちないクルスが彫られている。宗転とは「転び」の意味であろう。

クルスにつけられた鈎かぎがいかにも稚拙なのは、後難を恐れた家人

がクルスの先端に細工を施したのであろうか。心岳宗転についての記録も伝承も失われている。

別府市にある庶民の墳墓で、寛永の年号が刻まれた墓石は、キリシタン関係以外には発見されていない。(中須賀曹源寺墓地にも数基ある)

キリシタン地蔵



南石垣の廃庵・徳林善庵内に安置されていたもので、現在南石垣墓地にある。

地蔵は首部を欠く23.5 cmの小さいもので、蓮華座正面に「一影童女」、蓮弁台座の両側に「元文五(1740)申歳二月二十一日」と彫られている。

キリシタン信仰が元文五年まで石垣地区に存在した証である。別府のキリシタン遺物の下限が享保年間(1716～35)とされていたが、下限を5年押し下げたことになる。

クルスの輪郭は整っていないが、地蔵の底面部の台座と接する面に幅広く彫られている。

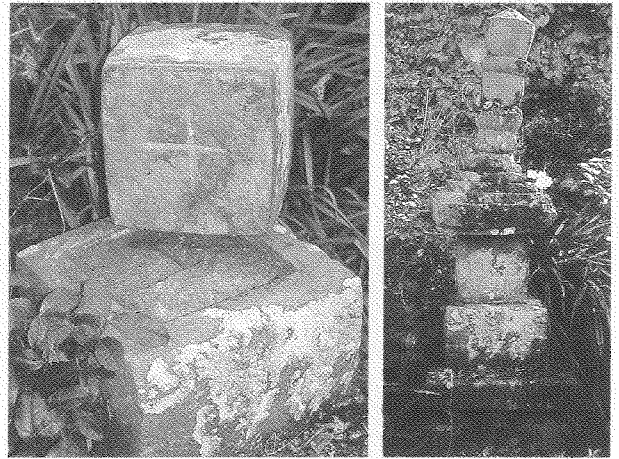
一影童女がキリシタンであったか、類族であったかは不明である。

今では、南石垣墓地に市指定文化財の寛永キリシタン塔と並べて安置されている。

朝見のキリシタン塔

朝見大野家墓地の宝篋印塔形式のキリシタン塔で、段のある笠は隅飾を欠き、独特の相輪を備えている。

キリシタン塔は多くの場合、接面部にクルスを隠彫りしているが、この塔は塔身と基礎の接面部に彫られている。その他キリシタン塔に共通の引掻線クルスが随所に見られる。



とます 斗升形キリシタン伏墓

斗升は米を量る一斗升のことで、墓の形が斗升を伏せたように見えることから名付けられた。伏墓はキリスト教特有の形式で、キリスト教とともに西洋風の墓形が伝来したのである。

この斗升形キリシタン伏墓は東山地区後畑の田原寧邸内にあり、縦横約50 cm、上面はやや丸みを呈し、頂部に球形の隆起を造り出している。この他奇棟形に加工したものや、頂部の隆起が方形のものや球形のものもある。

伏墓は由布院並柳の系統を引くもので、東山の村々は江戸期の村区分では由布院筋に属していたことに関係があるのであろう。



石 塔

別府市には、県・市指定の石造物(建造物)が18件、ほかに石塔群が2か所ある。この中には近代になって市外から移入された塔がかなりある。

指定の対象になる石造物は、地域性が特に顕著なものや美術的に優れたもの以外は、建造が江戸期以前のもので、記銘・記年の明確なものに限られるようである。

ここにあげる石造物は、一部を除いて地元のもので、その造立は近世のものが多い。

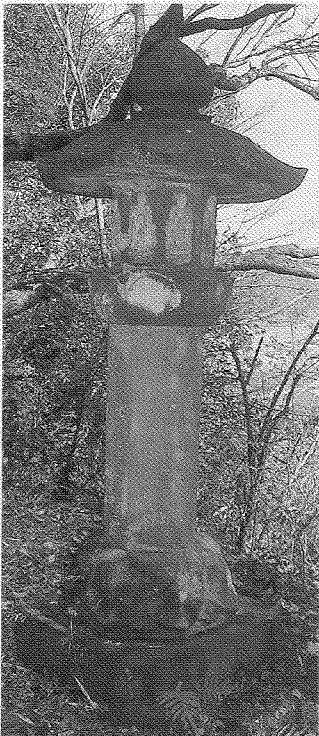
石 幢

石幢は中国で仏堂内に懸ける一種の旗の形からでたもので、わが国では石の幢身に経文を刻む石幢は鎌倉時代前期から造立されるようになった。

石幢の形は基礎・幢身(竿)・中台・龕・笠からなる複制(重制)と、基壇・幢身・竿の単制がある。

鑑掛薬師堂石幢(内成)

薬師堂の石祠と、内成から詰へ抜ける昔の道路(今は薬師堂の前庭)を隔てて向い側の楓の大樹のもとに、均整のとれた石幢が一基立っている。



鑑掛の石塔は全高248cmの複制石幢である。基礎上段部の反花は大きな複弁で重量感がある。幢身は八角で、三面に銘文が彫られている。おおらかな複弁の請花がそのまま中台になり、八面の龕には六地藏と十王像の二体が半肉彫りされている。

彫刻は実に繊細で六地藏はそれぞれ幣や鈴など取りものが彫られ、王像の頭上にキリーク(阿弥陀)とカ(地藏菩薩)の梵字

が添えられている。

八角の笠は軒にやや反りがあり、その上に乗る宝

珠は下部が膨らみ先端が鋭く尖っている。

幢身の銘は次のとおりである。

正面 延命地藏菩薩經石書之塔

右 元文四己未三月廿四日(1739)

左 功德主 鑑掛村信男女中

梶原石幢(内成)



梶原地区の三叉路脇に梶原石幢がある。

基礎は複弁の反花でやや小振りである。

中台は複弁の請花で支えられ、蓮弁には膨らみがあり端正である。

幢身は八角で龕の仏像は、鑑掛と同じく半肉彫りされた丸みのある六地藏と十王の二体がある。

笠は八角で中台よりかなり広いが、全体的に安定感がある。下部基段には杯穴が無数に穿たれている。

幢身には六面にわたり次のような銘文が刻まれている。

正面 奉造立六地藏王菩薩

右 延享五戊辰歳(1748)四月二十四日

功德 村中信男女等助縁仏講中

願主 泰巖義見叟

石工は鑑掛石幢と同一人物であるという。

小倉(照湯)石幢

照湯浴場前の道を右に20mほど登ると、樟の大樹の根元に石幢が立っている。

造立年代や銘文は見当たらないが、この石幢が以前からこの場所に立っていたことは、伊島重枝が弘化二年(1845)に書いた『鶴見七湯廻記』の挿絵に描かれていることでわかる。

基段は自然石が積み込まれていて見ることができない。幢身は丸竿で荒削りである。

中台は八角で28枚の蓮弁が台を支えている。

龕も八角で、八つの額縁に六地藏と十王像の二体が陽刻されている。

笠は厚い円形で中台とほぼ同じ広さである。

高さは220cmほどで、宝珠を欠いている。石幢の周辺には角塔婆が1基と石殿や地藏が安置されている。



いた び 板 碑

板碑は山形にした頭部の下に、二条の切り込みを入れ、全面に突き出した額部を設け、その下を平らに削って身部とし、根部に基段を設けた石塔が板碑である。

板碑は鎌倉時代に起こり、室町時代には形式化しながら量的に増加した。ほぼ中世に限って造立された特色のある石塔といわれる。

とらごせ 厩御前の塔



別府ではいくつかの板碑を見ることができ、実相寺山山頂にある板碑は、優雅で気品がある。

総高約2m、幅55cm、厚さは基部で34cmあり、身部上段に釈迦如来を表すバクという梵字の種子が葉研彫りされており、県下でも大形の部に入るものである。

記年がないが、形態から推して南北朝時代(1333~67)は下らな

いと思われる。

先にあげた『鶴見七湯廻記』に

「(実相寺山)山頂に石塔有りて梵字ほのかに見ゆのみ 月日なども見えねばいかなるものとも詳らかに分かりがたし 古老の口碑に伝たるは 厩御前の塔とのみ云ふ 此名これある塔諸国なども又あまた有とかや

…又或説には昔は寅待というをして 願望成就の後寅の塔とて建てしものとも有とも云り」と書かれている。この板碑は俗に厩御前の塔と呼ばれてきた。

実相寺山麓の水車地区にあった市指定文化財の永享石幢(1430)や永正板碑(1516)にも劣らぬ風格が備わっている。

ちようふくし 長福寺板碑

八幡竈門神社参道の一の鳥居の上手に観音堂がある。この辺りに天長三年(826)、八幡竈門神社に置かれた神宮寺のひとつである長福寺があったといわれている。

寺の歴史を示すように域内に年代の古い五輪塔が幾つか残っている。

堂の左脇に、身部の上部にキリーク(阿弥陀・千手観音)の種子を葉研



彫りした高さ120cmの板碑が立っている。幅34cm、額部の厚さが25cmあるこの板碑は、室町時代初期のものと考えられ、角塔婆のような重厚味のある板碑である。

観音堂には千手観音立像が安置されている。

ほうきよういんとう 宝篋印塔

宝篋印塔は塔身に宝篋印陀羅尼経を納めたことからこのように呼ばれるようになった。鎌倉時代から造立がはじまり、宗派をこえて石塔の主流になった。

基本の型は、基盤に方形の塔身を置き笠をのせる。笠は下部に2~3段、上部に数段の段形を造り出し露盤の上に相輪を立て、四隅に隅飾突起を造る。時代にしたがって型に変化が出るので、編年の基準とされている。

実相寺地区の宝篋印塔



実相寺地区の旧往還に沿った空地に、5基の宝篋印塔が南北に並んでいる。5基ともいたみが激しくいずれも相輪を欠いているが、塔の形式から南北朝以前の造立と見受けられる。

特に中央の塔は笠上部の段形、露盤、大きくて直立する隅飾りは鎌倉時代のものとされる。

宝篋印塔の銘文や年号は剥落して見ることはできないが、この辺りは『豊陽古事談』によれば、天平勝宝三年(751)に明賢が建てた旧実相寺の寺跡であり、域内に石塔が遺っても不思議ではない。

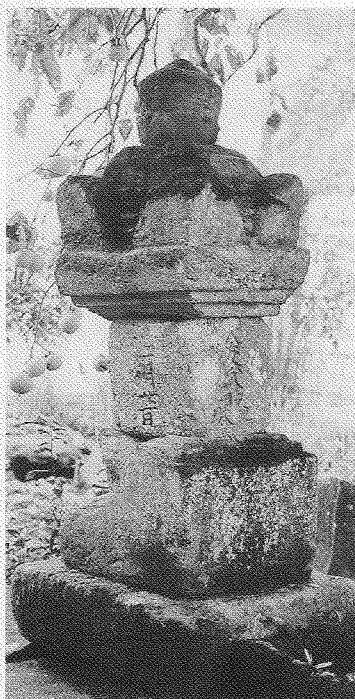
大友氏時の塔

乙原吉祥寺北の墓地に寺の開山塔と並んで「大友氏時之塔」が立っている。

『豊後国志』に氏時の墓は「朝見郷朝見村吉祥寺廃址ニ在リ」と書かれている。

氏時は朝見郷御塔原に昌華祐和尚を招いて吉祥寺の開祖とし、自ら「三世供養」のため宝篋印塔を建立したと伝えられる。

笠上部の段形も急で直立した隅飾りが大きく重厚味がある。露盤には宝珠が乗っているが、もとは長



い相輪であったと考えられる。

大友氏時は貞和四年(1364)、兄氏秦より家督を継いだ。当時は南北朝の騒乱期で、氏時は北朝の足利尊氏に属して、肥後の菊池武光や懐良親王の南軍と激しく戦った。この間に高崎山城を築き菊池軍を何度も迎え撃った。

別府はかつて、氏時が南北朝の騒乱で、また持直の時には山口の大内氏に侵入され、義統の時には薩摩の島津軍の蹂躪を受けた。

氏時は応安元年(1368)に没し、墓は庄内町大応寺にある。

塔身には、正面に「大内氏時之塔」、右面に「文和四乙年(1355)」、左に「二月二十一日」と彫られている。したがって、この塔は氏時が生前に造立したことになる。

重厚味のある、しかも端正な南北朝期の武者を思わせる塔である。

山家一の坪宝篋印塔

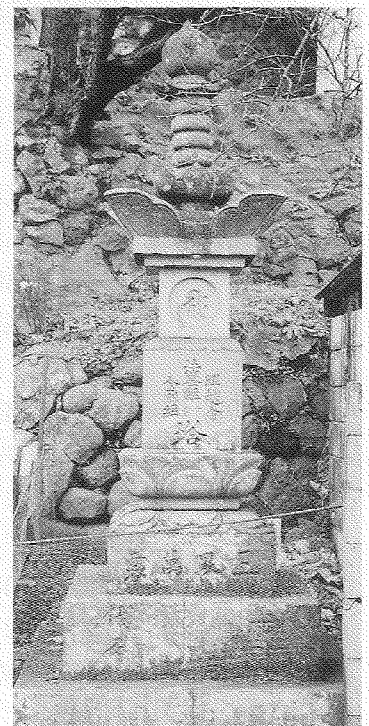
浜脇山家一の坪の線路脇に宝篋印塔がある。むかし浜脇の素封家が崇福寺の隠居寺として建てた東庵寺の境内と伝えられている。

この宝篋印塔は、文政五年夏五月吉日(1822)の造立で、当市の江戸期の宝篋印塔では新しい。

基壇は複弁の反花・請花を拵えて台座と塔身を乗せている。

塔身の東西南北には月輪の中にキリク(阿弥陀)・ベイ(薬師)・バク(釈迦)・カーン(不動)の種子が薬研彫りされている。笠の隅飾突起は開き、伏鉢の上の大きな請花が相輪を支えている。

台座中央に、法華経一字一石塔、右に理趣分、左に金剛経とある。他の三面の銘文は省略する。



五輪塔

五輪塔は、地・水・火・風・空の五大宇宙の生成要素を説く、仏教思想に基づいた率直簡明な塔婆である。

もちなお 大友持直の五輪塔（亀川四の湯）



観音寺は『豊後国志』に「大友刑部少輔持直永享年中創焉」と書かれるように大友持直の創建とされる。

持直は応永三十年（1423）叔父親著から家督を受け継ぎ、大内氏との抗争に加えて家督争いに絡んだ一族の確執に明け暮れた。

豊後守護であった持直が、荒廃した相宗寺を再興して円通山観音寺と改称したといわれる。

本堂裏の古塔群の中にある持直の墓と伝えられる五輪塔は、水輪がやや小振りであるが、火輪の傾斜、堂々とした風・空輪は、室町時代の五輪塔の特色を備えている。

その他の石造物

こうしんぼとけ 庚申佛の鳥居



鳥居は神社の神域を表示する建造物で、玉垣の入

口や社頭・参道の入口に建てられている。

庚申仏の鳥居は、八幡朝見神社の夏越祭で神輿が松原の旅所に神幸する道の途中に建てられており、奉納者、建造年が明確な市街地に残る江戸期唯一の鳥居である。

「寛政三年辛亥（1791）年十二月吉日」

「願主別府住 荒金市郎兵衛通吉」と両柱に彫刻されている。

別府の豪商といわれた栵屋（たばこや）の元を起こした市郎兵衛通吉が商売繁盛を祈願して八幡朝見神社の参道に奉納したものである。後に娘婿に迎えた義八郎（呉石）が本家の栵屋を助けて全盛期を迎えた。往年の栵屋を物語る数少ない遺物の一つであり、また、江戸時代の神幸道を示す遺物である。

とうろう 代官寄進の石灯籠



八幡竈門神社に岡田庄太夫俊惟が日田代官になった享保十九年（1734）に寄進した石灯籠がある。岡田は定免法を実施して年貢の増徴を凶ったので日田郡では百姓一揆が起こった。

過酷な代官ではあったが、竈門神社で横灘十七か村・木付筋七か村の五穀豊穰を祈願して風鎮祭りを催した記録が神

社に残っている。

参道に向いた面は剥落が著しくて判読が難しいが、側面には

奉寄進代 岡田庄太夫

享保十九甲寅二月吉日

とある。

一對の寄進と思われるが、対面の灯籠は刻銘が判読しにくく、形態も多少異なる。

屋田宗閑の墓

屋田宗閑は中石垣村の庄屋であった。善政を布いて村人から名庄屋と慕われたそうである。

宗閑は文政二年八月十三日に他界したが、無類の酒好きで、生前から酒樽の墓を作っていた。

高さ約2mの堂々とした墓石は、四斗樽に大杯をかぶせ、樽の下にも、二個の杯を据えている。

酒樽の裏側に

「七十まで朝夕のみし杯を
笠にかぶりて死出の旅かな」

と時世の句が彫られている。

文政四年に亡くなった息子宗智も、父の墓の側に同じ酒樽型の墓を建てている。



道標

日暮庵道標

別府には南北に貫く往還が通っていた。豊前豊後を結ぶ小倉街道（豊前街道）である。

この道は境川を涉って別府村の入口にある日暮庵に至り、野口を経て西法寺前、流川、秋葉神社前、朝見川を渡って浜脇の崇福寺横を登って赤松の銭瓶峠から府内（大分）に通じていた。

この道標は江戸時代、別府村の素封家が日暮庵に建てたもので、現在別府市美術館に移設している。



東面に「日出・杵築道」

南面に「左のうばる道」

裏面に「安政七庚申年」

「堀助之丞・油屋順策」

と深く陰刻されている。

左の「のうばる道」は鳥居峠を越え由布院を経由して日田に通じる道である。天保十五年（1844）、府内藩主に招かれた広瀬淡窓はこの「のうばる道」を通過して来別した。

銭瓶峠道標と銭瓶石

天領の赤松村と府内領の境界の銭瓶峠にある道標で、

「東府内道」

「北別府道」

「南どうじり道」

「西ゆふいんみち」と彫られている。

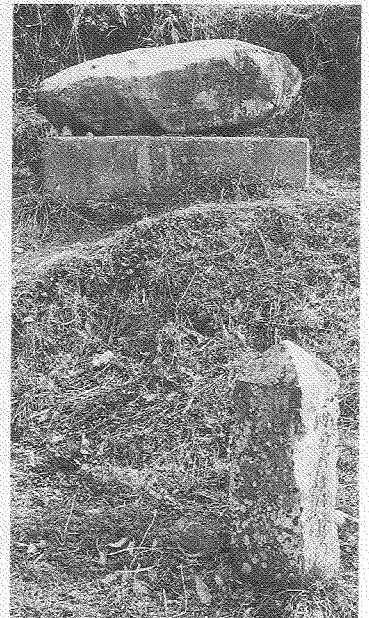
府内と別府を結ぶ道は小倉街道で、南は挾間を経て賀来へ、西は山の口を経て由布院に至る道である。

府内道は高崎山の

中腹をまいて城ノ腰・柞原八幡を経て府内城下に至る道で、城ノ腰付近には今でも残っている。

銭瓶峠は陸上交通の要地で、安政年間の旅行記に「…別府より壱里登り銭瓶峠とて海辺に大なる峠あり 式畳敷ばかりの白大石あり 打ちみればかんと音をなし奇妙也」とある。

府内藩田の浦村と赤松村は鳴川の谷が国境で、林場の入会権をめぐる争いが絶えなかった。その目印が峠の銭瓶石（カンカン石）であった。



古墳と遺物について

別府市で考古学に関心が向けられるようになったのは、戦後、それも九州横断道路の工事や、石垣地区の区画整理事業が始まってからである。

箱式石棺



別府市美術館に展示している箱式石棺は、戦後上朝見(枇杷の木)から出土したものである。これについての発掘記録はない。昭和24年頃、円通寺で当時の鶴見丘高生が人骨の納まっている組合式石棺を発掘したが、この記録も石棺も失われて今はない。

箱式石棺は、鉄平石(板状に生成した安山岩)を長方形に組み立てて棺を作ったもので、弥生時代のもと考えられる。昭和39年に青山町から出土した長方形の墓穴を石の蓋で覆った石蓋土抗墓も弥生時代のものである。

水神様の祭祀土器

別府市美術館に展示されている縄文土器や弥生土器は、石垣地区の区画整理事業の工事の時に採集されたものである。当時、石垣の末行(吉弘郵便局付近)からミニチュアの高坏、甕、鉢、椀などの弥生土器が一か所にまとまって出土した。

石垣の村々は鶴見山の扇状地(鶴見原)の延長面にあり、古代から用水は扇状地の縁から湧出する伏流水を利用して、里人は南北に点々と連なった湧水口を出水と呼んで大切にしていた。

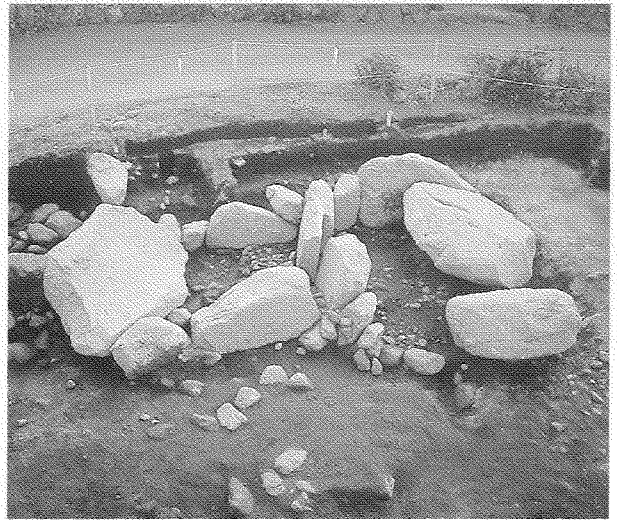
湧水は生活はもとより耕作に欠くことができないので、石垣地区では近世まで湧水線を境に畑作と稲

作に作り分けが行われていた。

おそらく弥生時代から人々は水の神に供え物をして、加護を祈っていたのであろう。末行の祭祀土器はこんこんと湧く出水口から出土した。

天神畑古墳

平成2年、北石垣の次郎・太郎塚、鷹塚の付近で発見された横穴式石室墳。周溝などの外部施設はすでに破壊されており、規模は不明である。



横穴式石室は、全長約3.3mで、方形の床面プランを呈する玄室と、羨道あるいは前室から構成されており、玄門は方形の加工石で閉塞されている。奥壁、側壁は腰石が残存しているが、上部の構造は不明な点が多い。羨門付近からは平らな巨石が出土しており、これが石室を覆っていた天井石である。また、奥壁と側壁には朱を施した跡が残っているが、装飾は認められなかった。

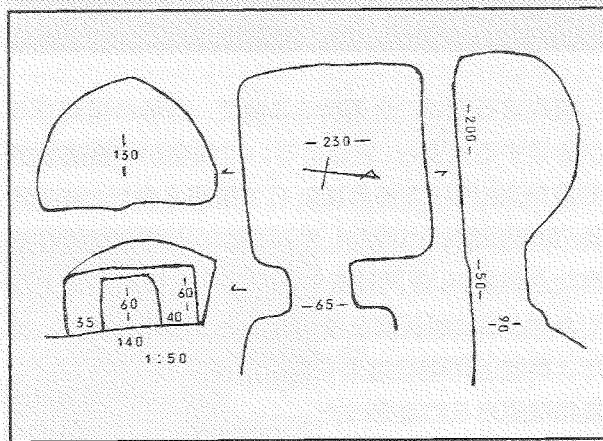
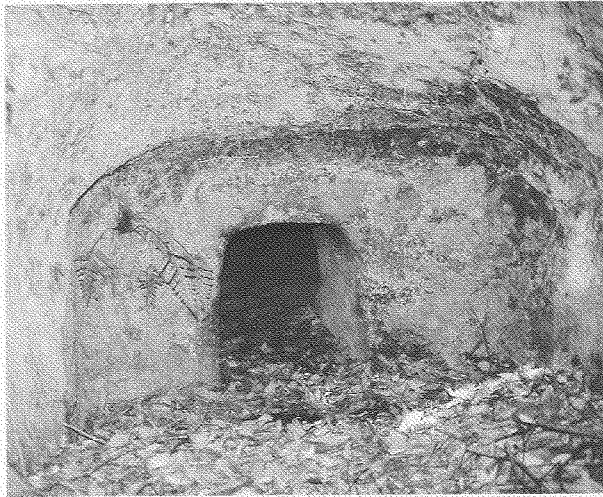
石室内、及び周辺の埋土からは須恵器の甕、高坏の破片と、馬具の一部と思われる鉄器片が出土している。このことから、天神畑古墳は6世紀後半～末に築造されたもので、次郎・太郎塚、鷹塚の円墳群に属する群集墳の一部と考えられる。

現在は復元して、実相寺古代遺跡公園内に移設している。

浜脇横穴墓

浜脇の横穴墓群は、浜脇中学校裏手の^{こんびら}金比羅山と芝尾、平原の3ヶ所に集中している。凝灰岩質の急斜面に穿たれているので、崩壊が著しい。

昭和8年の調査によると、芝尾・平原古墳群に24基、金比羅山古墳群に26基とされている。「九州横穴の形式と時期」(「考古学雑誌」)にも記載されているが、現在では満足に横穴墓の形態を残している横穴は数えるほどしかない。実測も記録もされぬまま消えさろうとしている。

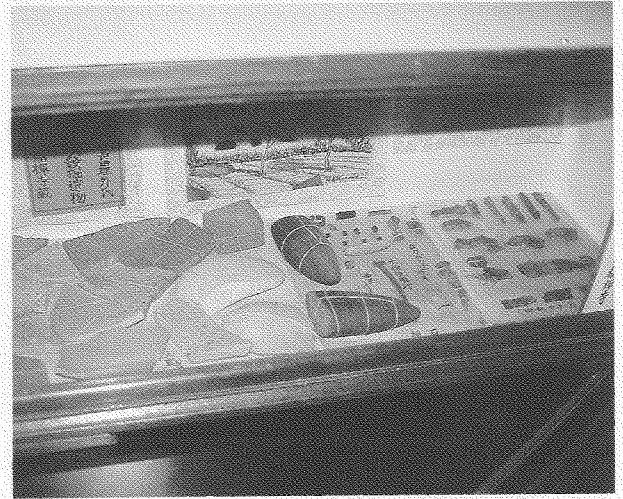


浜脇の横穴は前庭・羨門・羨道・玄室の構造が一般的で、玄室の床面は方形・円形・羽子板形のものがある。羨門はすべて開口している。(略実測は昭和45年入江が実施した。)

金比羅山の横穴墓の中には、玄室の壁に鉄製の^{おの}大鑿のみなを使って穿った跡が残っていた。

横穴墓は大化の改新の^{はくそうれい}薄葬令によって高塚が禁止されたのち、7世紀から奈良時代が終わる8世紀末まで営まれ、庶民にまで広がった。

金比羅山横穴から出土した遺物は河内の修福寺にあり、須恵器や土師器の他に鉄鏃、銅製釘、銀環金と きん、まがたま勾玉、くだたま管玉、きりこたま切子玉、ガラス玉、鉄製轡、土錘などが保存されている。土錘は里人が漁労で生活を支えていたことの証左であろう。

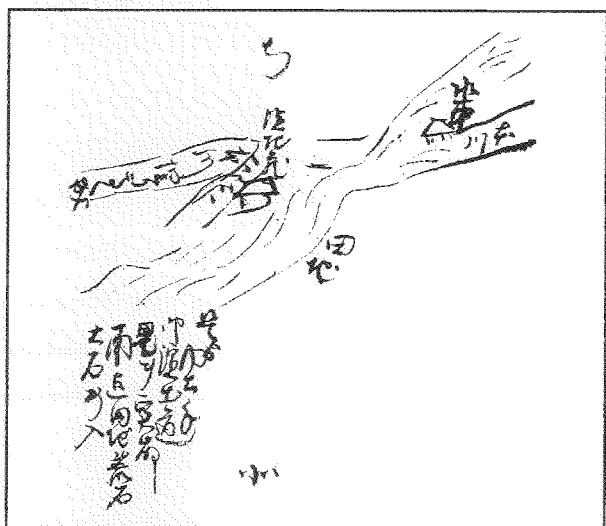


氾濫の記念遺物

別府の河川は扇状地やその縁を流れるもので、通常の水量は少ないが、一度大雨があると堤防が決壊し氾濫することが多かった。江戸時代の洪水の惨状を記録した文書がかなり残っている。

朝見川の潮（塩）地蔵

鳥居峠を水源とする朝見川は、大雨で増水すると観海寺から丸尾山南東の谷に流れ落ちて、右に迂回して一の出、朝見と堤防を次々に切って、別府村を押し流して海へ出るのが定まりのコースであった。幕府は一の出付近に再三堤防を築いたが、現在は見る事ができない。



安政二年七月の『諸用留』に次の記録がある。「…山潮出水、潮地蔵上切れ、南町萩屋大石入り白河原なり、家々に土砂押し込み内も戸も壁もせり崩し、土石入りて町は高くなり道路止まる。浜辺の屋敷に（水）堰かれ水はきかねて楠湯辺り大損、永石川のシリ大破して河幅広くなる…〔抄〕」「〔萩屋諸用留〕」

潮地蔵の「潮」は山潮の潮で、護岸のために安置されていたものと考えられる。

境川の石書大乘妙典塔・水はね様

境川は枯れ川で、「境河原」と呼んでいた。

しかし、いったん豪雨に見舞われると大洪水を起こし流域の人家や田畑を押し流す荒川になった。

享保十四年（1724）九月十三日の氾濫は台風もたらしたものであろう。

供養塔「石書大乘妙典塔」の銘文によれば、川は

北岸が切れて、下流の別府村と南立石村大境の家々二十余軒が潰れ、双方の村の男女の溺死者が21人も出たと書かれている。

この妙典塔には小浦村の尾林氏が、府内の万寿寺の僧に碑文を書いてもらい建立した経緯が書かれている。

また、『家宝珍事記』も天保九年（1838）七月二十一日、上流の右岸の御普請所を押し切った土石流が、新しい流路をつくって別府村内（天満地区）を流れ下り、天満社の前を迂回して本流に合流して海へ流れたことが書かれている。



御普請所の堤防が決壊すると川は左右両岸自在に流路をつくって人家や田畑を押し流した。

境川の流域には流れの抵抗を強く受ける所に堤防を築き、決壊を防ぐために「水はね様」を祀って「水神」の石祠を建てて護岸を祈願した。

曹源寺弘法石像

春木川は御門川とも呼ばれ、鍋山と内山の谷が上流である。旧鶴見村ではこの流れを祓川と呼んでいた。

照湯付近は特に氾濫しやすく、度々荒廃した。弘化二年（1845）、洪水で潰れた照湯を藩主の久留嶋通嘉が再興したことは『鶴見七湯廻記』に詳しい。

再建七年後の嘉永五年（1852）に春木川は再び氾濫を起し、照湯はまた崩壊した。

安政五年に曹源寺に寄進された弘法太子石像の台座に

「月潭和尚新立石像嘉永五子為洪水流失于茲別府信男堀順策勝重再興復旧安政五年正月吉日」

と刻まれている。

嘉永五年の洪水で流失した堂宇や仏像を堀順策勝重が再興したことを記録している。



...の無常の世には、安政の間に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

...の世に...

執筆者

別府市文化財調査員

入江 秀利・土屋 公照

別府市教育委員会社会教育課

永野 康洋

べっぷの文化財 No.31

発行 平成12年3月15日
別府市教育委員会社会教育課

編集 別府市文化財調査員
別府市教育委員会社会教育課

印刷 別府印刷株式会社